

日本の伝説9

浜口一夫・吉沢和夫

佐渡の伝説



日本の伝説 9

浜口一夫
吉沢和夫

佐渡の伝説



角川書店

浜口一夫（はまぐちかずお）

大正15年（1926）新潟県生まれ。新潟第二師範学校卒。相川町立高千中学校校長，日本民俗学会会員。主要著書『高千村史』（高千公民館）『佐渡の民話』（未来社）『佐渡風物誌』（未来社）

吉沢和夫（よしざわかずお）

大正13年（1924）千葉県生まれ。東京大学文学部卒。都立北園高校教諭，子どもの文化研究所常任委員。主要著書『民話の再発見』（大月書店）『日本の民話・ふしぎなげた』（筑摩書房）

日本の伝説（第Ⅰ期）全12巻

9 佐渡の伝説

昭和51年8月10日 初版発行

著者 浜口一夫
吉沢和夫

発行者 角川春樹
印刷者 中村武
製本者 宮田四郎
発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13
電話 03（265）7111〈大代表〉
● 102 ● 東京 3-195208

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

信教印刷・宮田製本

0326-722009-0946(0)

目次

佐渡伝説散歩／浜口一夫

両津・国仲

佐渡へのいざない

ハタハタ タライ舟 竜王岩

加茂湖の水鏡

村雨の松 加茂湖の主 武右衛門地蔵 加茂湖のできた

由来 金北山 地持院の古松

悲劇の帝・順徳上皇

お花屋敷 稗の粥 三杯菜 石抱梅 苔梅 八つ房梅

御所桜 ボタ原

炎の人・日蓮

御井戸庵 袖が沢の七面天女 白い頭のカラス 犬塚

弘樹寺の仏さん おけやき 日朗の経島 御梅堂 袈裟

掛けの松 日蓮腰かけ石

金島集の世阿弥

七

九

二〇

三

二〇

二五

三

雨乞いの面 世阿弥の腰かけ石

真野

秋たけし沢田の里

阿新丸の隠れ松 ごうもん塚 大膳屋敷・ふしぎな花

器 手なし地藏

石仏の群

十郎滝 経塚山 梨の木峠 小泊石工

越の松原

大力の長八 ほととぎす啼かずの里 乙和が池

相川

金山の光と影

白島 鬼が岩 道遊の割戸 徳利の又吉 大久保長安

鎮目市左衛門の供養塔 弁慶のはさみ岩 千疊敷 炭焼

きの藤五郎 但馬さんと春駒

むじなと遊女

二岩団三郎 松姫君 水金怪談

海府

尖閣湾の周辺

二 三 四 五 六 七 八 九 十

権八と車輪梅 小川権助 小川中の浜観音 笠置山 濡
れ仏 トンチボの踊り場 長井戸 小菰山 鉾山 生貫観
音 伊勢祭主屋敷 猿のけつ跡 ボウコ
海府の奥

七〇

安寿厨子王 ダッタン人の墓 夕鶴の里 ドンデン カ
ツボラの池 影の神 弁天崎の赤岩 お杉悲恋 お岩さ
ん 竜眼の池 こしき落とし 山居の池 賽の河原
黒姫の鬼

一〇一

鬼の田植え お竹地藏 平松の一つ火 馬首

南佐渡

一〇五

小木は澗でもつ

一〇六

矢島・経島 佐渡おけさ 船止め地藏

三崎めぐり

一〇九

宿根本 岩屋さん 犬神長者 能登のお菊と土佐の三

助 堂釜海賊 小比叡蓮華峰寺

羽茂落城の賦

一一三

歩く組板 槍弾正と羽茂川の主 神立淵 まさの滝 仮

屋敷跡・弾正屋敷 病田 八百比丘尼

前浜海岸

一二七

カサモリさん タタズが浜 杉池

久知の里と鐘

風島弁天 宇賀神さん 長安寺の朝鮮鐘

佐渡伝説二十五選／吉沢和夫

村雨の松

加茂湖に沈んだ武右衛門

阿新の仇討

萩野善右衛門と人魂

弥三郎婆さ

おとわの池

徳利の又吉

貉の親分団三郎

切支丹お島の猫

権八と車輪梅

海の底の蛇の目傘

佐渡二郎と安寿姫の母

姫名草

牛恋峠

二〇

二三

三五

三三

三七

四〇

四四

五五

五九

六三

六九

七二

七六

八〇

八四

八八

滝に落ちた池の主

田植え鬼

お竹地藏

おけさのはじまり

犬神長者

槍弾正と羽茂川の主

八百比丘尼

心中峠

佐渡へ帰った牛

男神山・女神山

宝杓文字

民謡採集手帖へ佐渡へ竹内勉

二〇

一九

二二

二五

三二

三五

三四

二四

二七

二九

三三

三七

佐渡伝説散歩

浜口一夫

写
真

名
烟
政
治

雨津・国仲



佐渡へのいざない

越佐航路から眺める佐渡が島は、ゆったり、長々と横たわり、優雅な姿である。

春ならば霞のまゆをひき、秋は縹の海の色に調和してじつに美しい。

晴れた日は甲板での船旅が楽しい。

かつて多くの流人たちが、この越佐海峡を渡った。中世における佐渡の国津は松ヶ崎である。越後寺泊港を結ぶ最短距離である。

悲劇の帝順徳院も、災の宗教家日蓮も、能の完成者世阿弥元清も、ともにこの航路を渡り、配所の月に涙している。

近世中期になると小木港が、佐渡金山の積出港として、また和船時代の寄港地として栄え、出船千艘、入船千艘とうたわれた。

現在の両津港が、佐渡の表玄関となるのは、

明治にはいつてからである。明治元年（一八六八）新潟港の補助港としての指定をうけてから、冬も花咲く山茶花港と呼ばれ繁栄するのである。さて、佐渡に流された順徳院にからむ、こんな伝説がある。

順徳上皇が佐渡に渡られるとき、悲しみのあまり、船の上より旗を海中に投げられ、

「生あらば魚になれ」

と言われたところ、ひらひらと泳いで、ハタハタになったという。

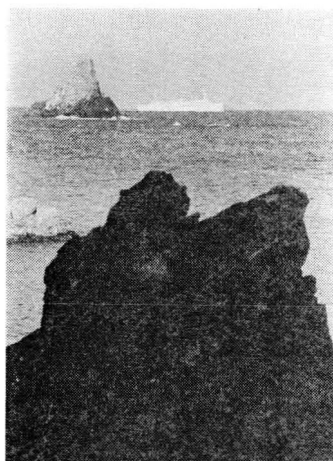
ハタハタは別名雷魚とも呼ばれ、初冬の暗い海に、雪おろしの雷が鳴りひびくころ、佐渡の近海でよくとれる。

砂地で冬でも海の静かな小木海岸では、産卵のため砂にもぐり、目だけを出しているハタハタを竹ヤスで簡単につく。味が淡泊で塩焼きとミソデンガクがうまい。卵はブリコといい独特

の味をもつ。

越佐海峡にちなんだもうひとつの伝説に恋しい男の住む、対岸の越後潟町まで、夜な夜なタライ舟で通いつづけた島娘の悲しい恋の物語もある。それらの話を思い浮かべながら、越佐の海を渡るのも、また楽しい。

越佐航路は約二時間である。船が佐渡の島影に近づき、まず目にはいるのが、姫崎灯台と竜王岩だ。



順徳院、船遊びの竜王岩（沖）。

竜王岩にも、順徳上皇にちなんだ、こんな伝説がある。

順徳上皇がこの岩の付近で船遊びをされた。海は青く、大佐渡山脈を遠望できるその眺めの美しさに、上皇も侍従もうつとりとされ、ついに佩刀を海中に落としてしまった。上皇は悲しみのあまり、

東の間も身を離たじと契りしに

波の底にもさや思ふらむ

と、口ずさみ給うた。すると、海中の竜王が、お刀をささげて浮かび上がり、上皇にたてまつった。上皇は大変お喜びになり、以来この岩を竜王岩と呼ぶようになったという。

赤褐色のこの岩は、さながら竜が海面に頭をもたげたようなかっこうをしている。

船がこの岩に近づくころ、船内のスピーカーは、まずこの岩のいわれと伝説を語りはじめ、船上の旅人たちは、この巨岩に目をみはり、こ

れからはじまる佐渡の旅路の期待に胸をふくらませる。

竜王岩はいわば佐渡観光の序曲であり、導入部でもあるのだ。

加茂湖の水鏡

さて、船が両津港に着くと、すぐ鼻の先にあるのが加茂湖である。加茂湖は両津湾と、細い水路で結ばれている鹹水湖である。そして両者を結ぶ細い水路のほとりに、村雨の松と呼ばれる老松が、所せましと枝葉を伸ばしている。

この松は文化年間（一八〇四—一八）両津番所の役人西川藤兵衛の植えたものと伝えられ、「御番所松」とよばれたり、税関が明治になってここに建てられ「税関の松」となったりしたが、現在の「村雨の松」の呼び名は、明治三十



夜な夜な女が泣く村雨の松。

二年佐渡に遊んだ尾崎紅葉が、謡曲「松風」にちなんで命名したものである。幹まわり約六メートル、からかさをひろげたような枝張りは、いつもその下に深い陰をつくっている。

夏寒み芦火たくべき松蔭や 紅葉

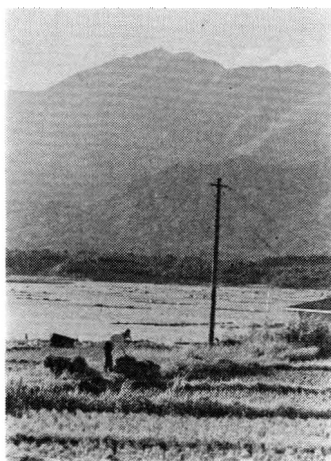
夏の日、村雨の松の陰にたたずんだ紅葉は、松陰の濃さをそう詠んでいる。

昭和三十一年、天然記念物として、県の重要文化財の指定を受けている。

なお、この松には夜な夜な女の声を出して泣くという、怪奇な伝説が伝えられている（二二五ページ「村雨の松」）。

さて、「村雨の松」を訪ねたその足で、すぐ近くの加茂湖のほとりに立ってみるがいい。古くは「越の湖」と呼ばれ、天下の景勝の一つに数えられ、文人墨客の筆によりひろく紹介されてきた。

よく晴れた日には、佐渡の霊峰金北山の水鏡



佐渡の霊峰金北山と加茂湖。

役をなす。

佐渡の金北山はおしゃれの山よ

いつも加茂湖に水かがみ

と、古くより民謡にうたわれている。

現在、湖面にはカキのいかだが点在し、美しいかすり模様を織りなしている。

周囲約一六キロ、佐渡唯一のこの湖に干拓を挑戦した男がいた。ころは元禄、加茂村の名主武右衛門である。

彼は大がかりな工事をはじめ、その夢の一部を実現するが、仕事なかばにして、加茂湖の主の怒りをかい、あわい月夜の晩、さそわれるままに加茂湖の底に身を沈めるとの伝説がある（二二二ページ「加茂湖に沈んだ武右衛門」）。

伝説の武右衛門は姓を榎といい、江戸時代の実在の人物である。武右衛門は加茂湖畔の加茂村の名主である。元禄八年（一六九五）字押廻の入江の干拓を奉行所に願ひ出た。工事は三か

年の歳月を要し、約一町三畝^{*}の新田開発に成功している。工事はなかなかの難工事であつたらしく、当時の絵図面を見ると、入江の入口の所に、長さ一三七間の堤防を造り、その中を埋めたてようとしている。そして埋めたての土砂は、入江に流れこむ赤井川などの水を利用し、長い木の樋^ひを連ね、山肌の土砂をきり崩しては流しこみ、埋めたてたという。この方法は相川金山の樋を使つての排水技術を、巧みに応用したものとわれている。その埋めたての排水口は、今も「流し場」と呼ばれ、干拓のため長く築かれた堤防は「武右衛門流し」と呼ばれている。

武右衛門流しのながながしさに

ついて登城（外城）も遅なわりつつ

と、土地の民謡にまでうたわれている。この工事に要した人夫は延五万人という。

武右衛門はなかなか剛気なやりてであつたらしく「わがいのち長ければ、この押廻地区ばか

りでなく、加茂湖の水面全部を良田に化す」とうそぶいたという。

武右衛門の死は、加茂湖の水神のたたりだと、伝説には語られている。が、その真実はやりての武右衛門に対するライバルの反感か、もしくは利害の相反する加茂湖の漁師たちによる他殺かもしれない。頭をもたげるものとかくねたみ、足をひっぱる島びとの悲しい心から、あわせ考え、ふとそんな推察を試みたくもなる。

あわい月の光の湖面を、美女と手をたずさえ歩いていった武右衛門の後ろ姿を、あわい月夜の船遊びにさそわれ、漁師に葬られた武右衛門の姿と重ねるのは、無理なものだろうか。

伝説はもちろん史実ではないが、史実の面影を語っている場合も多いのである。

武右衛門の「流し場」付近に、武右衛門地蔵堂が建っている。一名「流し場地蔵」ともいう。四季訪れる人の香花が絶えない。土地の古老は